

中央ヨーロッパにあるスロベニア。その首都リ  
ュブリャナで、五月十〜十二日、国際紙芝居シン  
ポジウムが開催されました。スロベニアはもとも  
と演劇や人形劇が民族の独立運動に大きな役割を  
果たした国で、今、紙芝居が国民的な人気を集め  
ています。きっかけは約五年前に、前衛的な人形  
劇団の主宰者イゴールさん&イエレナさん夫妻が  
紙芝居に出会ったこと。二人は紙芝居の運動を始め、二〇一六年に設立されたスロベニア紙芝居協  
会、スロベニア演劇協会と力をあわせて、国際シ  
ンポジウムを共催するまでになったのです。

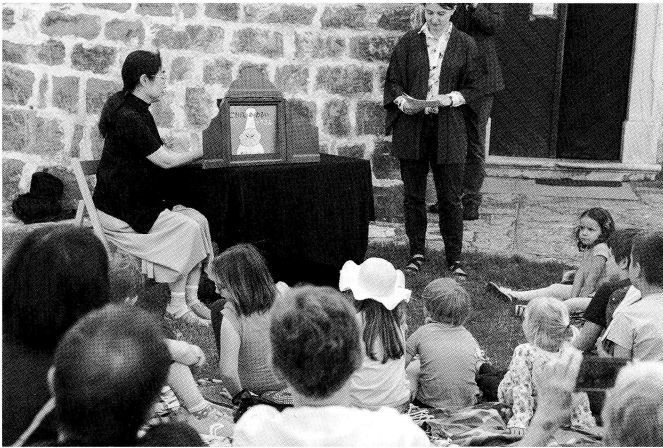
招待を受けた私たち紙芝居文化の会（略称「K  
AJA」）は、童心社会長でもある酒井京子代表を  
団長に、十一名で参加しました。

シンポジウムでは、酒井さんが紙芝居の特性と  
魅力についての基調講演を行い、私は「K A J A  
の十七年間の発展について話しました。発表者は  
全部で三十名。国策紙芝居に詳しいカナダ人の教  
授、東日本大震災後の紙芝居を調べるドイツ人の  
研究者もいれば、紙芝居の絵に強い興味を持つイ  
タリア人の准教授、「紙芝居友の会」を率いるス  
ペイン人の教師（「K A J A 海外会員のカルメン  
さん）もいて、その国際化に目をみはりました。

スロベニアからの発表もさまざまです。薬物中  
毒に陥った若者たちの立ち直りや、知的障害のある  
人たちの表現手段として紙芝居が役立つこと  
など、実践報告が多いなか、紙芝居における「共

## 人形劇の国スロベニアで開かれた 国際紙芝居シンポジウム

野坂悦子



フラストヴリエの教会で、子どもたちを前にして



シンポジウム会場は、スロベニア演劇協会のホール

感覚」(見ること、聞くことといった全感覚が合  
わさったうえで、想像の世界が開く体験)につい  
て語った映像ディレクターもいました。紙芝居の  
出版がまだ進んでおらず、作品も舞台もすべて個  
人の手作り、という点もスロベニアの特徴でした。  
「K A J A の運営委員の一部は、五月十日は首  
都から二十キロ離れたクラニーニハ、十一日にはシ  
ユタニエルへ足をのばし、現地の子どもたちや大  
人の前で紙芝居を演じました。抜いた場面を舞台  
に差しこんでいなかったスロベニアの演じ手に  
とって、場面を抜いたあと、かならず舞台上に差  
込む私たちの演じ方はとても新鮮だったようで、  
「どうやるんですか?」と質問が集中しました。  
シンポジウムでも、紙芝居という文化を深めるた  
めの演じ方を考えていたのは、日本だけだったか  
もしれません。

五月十三日は、参加者全員で遠足。緑の山並み  
に囲まれたフラストヴリエの教会の敷地で、また  
毎年紙芝居フェスティバルが行われる海辺の町ピ  
ランの修道院の回廊で、スロベニアの人も、日本  
のメンバーも紙芝居をつぎつぎと演じました。

紙芝居を通して作られる心の世界には、言葉の  
違いも、国境もない……目をつぶるたび、あのと  
きの喜びが、空の青さや波のきらめきと共に今も、  
よみがえってきます。

(のざか えつこ 翻訳家・紙芝居文化の会海外統括委員)